心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

2023

優秀作品集

小学生区分

香川県知事賞

ぼくとパラリンピックせんしゅ

三木町立氷上小学校　一年

髙崎（たかさき）　蒼莞（あおい）

香川県

小学生区分

香川県健康福祉部長賞

お兄ちゃん、どこに行く？

観音寺市立観音寺小学校　四年

石井（いしい）　絵麻（えま）

小学生区分

香川県健康福祉部長賞

ボッチャで広がる世界

観音寺市立観音寺小学校　六年
山本（やまもと）　歩澄（ほずみ）

中学生区分

香川県健康福祉部長賞

シュート

観音寺市立観音寺中学校　三年

遠山（とおやま）　夏梛（なな）

中学生区分

香川県健康福祉部長賞

支え合う社会

観音寺市立観音寺中学校　三年
真鍋（まなべ）　心（こころ）

小学生区分

審査員特別賞

みんなで助けあおう

観音寺市立観音寺小学校　六年

鈴木（すずき）　涼市（りょういち）

小学生区分
香川県知事賞

手話でみんななかよし

三豊市立下高瀬小学校　二年
板井（いたい）　若菜（わかな）

わたしの名前は、い・た・い・わ・か・なです。今年の夏休みに手話教しつに行って、自分の名前を手話で正しく話せるようになりました。ほかに、「さんぽ」のうたも手話でできるようになりました。

わたしのおかあさんは、家でよく手話のれんしゅうをしています。はじめは、何をしているのかわからなかったので、

「それは何。」

と聞いてみました。おかあさんは、

「耳の聞こえない友だちとお話するために、手話をれんしゅうしているんだよ。」

と話してくれました。それからは、わたしもときどきおかあさんといっしょに手話のれんしゅうをするようになりました。

一年生の三月に、六年生をおくる会で手話うたをしました。わたしは今まで手話をれんしゅうしていたので、みんなが、

「上手だね。」

とほめてくれました。とてもうれしかったので、もっともっと手話ができるようになりたいなと思いました。だから、おかあさんに

「夏休みに、手話教しつがあるから行ってみる。」

と言われたとき、わたしはすぐ行くことにきめました。

手話教しつに行ったとき、声を出さないで手話でお話している人がいたので、とてもふしぎでした。

「なんで手話でお話しているの。」

とおかあさんに聞くと、おかあさんはだまってわたしに耳せんをつけてくれました。耳せんをつけると音も人の声も聞こえなくなってすごくこわくなりました。そのあと、

「耳が聞こえない人は、ずっとそんな思いをしているんだよ。だから、手話は耳の聞こえない人のための大切なことばなんだよ。」

と教えてくれました。

はじめは、耳の聞こえない人とどうやって話したらいいかわからなくてどきどきしたけど、わたしがわかるようにジェスチャーでつたえてくれたり、絵しりとりをしてあそんだりして、どきどきはすぐなくなりました。言ばがなくてもなかよくなれてうれしかったです。そして、手話教しつにいる人はみんなえがおがすてきだなと思いました。

手話教しつのあと、レストランに行ったり、スーパーでかいものをしたりしたときに、今までなんとなく聞いていた音や声がたくさんあることに気がつきました。そして、この音や声が聞こえないとこまることがあるんじゃないかなと心ぱいになりました。だから、わたしはもっともっと手話でお話ができるようになって、こまっている人を見たら、すぐたすけられるようになりたいと思いました。

中学生区分

香川県知事賞

内閣府　優秀賞
（内閣府特命担当大臣賞）

高松市立山田中学校　二年　坂本（さかもと）　篤宣（あつのぶ）

僕の未来を変えていく

僕は進行性の病気の影響で車椅子に乗って生活しています。また、体も徐々に動かしにくくなり、できないことが増えてきました。

そんな僕の学校生活を支えてくれるのが友達や先生です。その中でも、特に関わることが多く、気軽に頼りやすい同学年の友達は、僕が困っていると自然に助けてくれます。しかし、助けるとき以外は、同級生として、変な遠慮なく対等に接してくれます。

ある授業での班活動のときのことです。みんなで神経衰弱をすることになりました。しかし、教室内での広範囲の移動は車椅子では難しいため、移動する方法を考えていました。すると、カードを置く場所を僕の机の上に変えてくれて、無理なく楽しく活動することができました。

また、今年の運動会前に僕は全員リレーで走りたいと担任の先生に伝えました。すると、昼休みに担任の先生を中心に、各クラスの体育委員や足の速い友達が協力してくれて、足で走る速さと車椅子で走る速さを比較して有利にも不利にもならない丁度いいスタート位置を見つけることができました。

このように病気だからできないと勝手に考える人より、小さなことも協力的に考えてくれる人がいることで世界が少しずつ明るい方向に変わっていき、いろいろな立場の人が尊重されるのではないでしょうか。

ただ、病気の僕が親切から感じることはこれだけではありません。僕は、親切な友達に疑問を感じることがあります。

小学校高学年の頃から、本格的な電動車椅子を使うようになり友達から助けてもらえても、自分は助けられないので、なぜこんなに親切にしてくれるのだろうという疑問を感じ始めたのです。中学生になると、助けてもらうことも小学生のときより増えました。それでも友達の対応はあまり変わりませんでした。だから、本当は仕方なく助けてくれているのではないかと考えることがあります。絶対にそんなはずないと否定したいのに、考えたくない想像が脳裏に浮かんできます。そして、助けてもらえた感謝と親切を信じきれない弱い自分への嫌悪感で複雑な気持ちになってしまいます。

それでも、僕とずっと友達でいてくれたなら、僕がもっと自信を持てたなら、いつか心の底から感謝できる日が来ると自分を信じています。実際に、僕が希望を見失いかけたときでも、ここで諦めたら、親切にしてくれた人達が悲しむかもしれないと考え、希望を取り戻したことは幾度となくあるからです。

きっと遠くない未来では、今の友達が助けてくれたことに心の底から感謝できていると強く思います。また、僕も親切をできる限り返したいです。そのために、いろいろなことを勉強して、直接でなくても、人や世界を助けられるような知識を身につけておきたいと思います。人生が急に終わっても、後悔しないように今を大切に生きていくと心に誓います。

過去も、今も、未来も、支えてくれて本当にありがとう。

高校生区分

香川県知事賞

障害者への理解

香川県立飯山高等学校　二年
後藤（ごとう）　優（ゆう）

私のお母さんは病院に務めています。病院の同僚には、障害のある方もたくさん働いているそうで、そのほとんどの方が事務員として仕事をされていると聞きました。サイズの違う封筒にきちんと収まるように、いろいろな書類を折り畳む人や案内物を作る人、使用済みのファイルを除菌する人、外来の患者さんの案内係などを担当しているそうで、お母さんと同じく毎日出勤し決められた時間勤務し退勤されているそうです。車イスに乗っている人でも少し通路を広くして、高い所にある物の配置を変えたり床に落ちてしまった物を拾ったりする程度の協力だけで、何の助けも要らずに十分に仕事ができるそうです。病院には多目的トイレなどもあり働きやすい環境が整っているのだとも聞きました。お母さんは何年も病院で仕事をしているので障害のある方と一緒に働くことはごく当たり前で、別に特別なことではないそうです。その人の様子を見て、その人のことを知りさえすれば自然に配慮ができて付き合っていける簡単なことだと言っていました。

お母さんの職場の掲示板に「両立支援相談窓口」というチラシや「がん就労」と書いてある案内用紙が貼ってあるのを見たことがあります。そのチラシには病気の治療を受けながら安心して働ける職場づくりのために活動している場所があり、治療と仕事の両立に悩む患者さんが職場の理解が得られるように一緒に考える取り組みがされているという内容のチラシでした。その時は人ごとのようにチラシを見ていたけれど、自分がいつ病気になるか、いつ大ケガそして障害者になるかは誰にも分からないことで、関係のないことではなかったんだと感じました。病気になった時に相談する場所があり、障害のある方が働ける場所があると知って安心したし、このような取り組みがもっと増えればいいなと思いました。

人権、障害のある人とのふれあいと重く感じていた作文のテーマでしたが、これは自分にも友人にも家族にも当てはまるすごく身近な言葉でした。お母さんの話を聞いて感じたことは、まず相手のことを知ることから付き合いを始めればいいかもということです。障害を持っている人にしか分からない気持ちを隅々まで知ることはできないけれど、相手から自然に伝わってくることを知ることはできると思うので、まずはその人のことを知ることから始めたいと思います。これができてあれは無理などを知るのではなく、長い時間をかけて相手を知り自分を知ってもらって、望むことや望まないこと、どんな時に見守りどんな時に手助けするかを知っていくことができたら、私にも障害を持っている人と良い関係が作れるような気がします。自分が社会にでて働くことと、障害のある人が働くことは全く同じことだと思うことが大切だと思います。それは自分がもしも障害者になった時に同じように思ってほしいからです。それは特別なことでも難しいことでもないと思います。

人権はみんなに平等にあり、決して人権を侵してはいけません。なぜなら自分が人権を侵されたら相手を許せないからです。健康ならまだ相手を許せないとまでは思わないかもしれません。しかし自分一人でできないことが多く、手助けが必要なことがあればあるほど人から嫌がられたり恨まれたりしたら、心が傷つき耐えられない気持ちになって相手と良い関係どころかトラブルの原因になってしまうかもしれません。まず障害のある人の気持ちに寄り添いその人を知る、そして認め合い、その人がいることが当たり前になるまで長く付き合いたいと思います。自分だっていつ病気になったり障害を持つか分からないのだから、常に周りに気を配りながら行動したいです。

社会には、もし障害を持っていても受け入れ、サポートしてくれる場所があるとも知ったし、なんだか心が広くなった気分です。将来自分が働く場所もお母さんが働く病院のような場所であってほしいし、自分がそういう場所に近づけられるように障害のある人に理解を持ちながら生きていきたいです。これから関わるすべての人に、偏見を持たず、平等に接していきたいと思います。

一般区分

香川県知事賞

心でみて、心で触れよう

三豊市
林 凜々子

笑顔でいる人は本当に笑っているのか？人はその笑顔の裏側を知らない。多くの人がその笑顔に騙されるだろう。

私は社会人三年目、スウェーデン製の電動車いすとも、もう三年目の付き合いだ。身の回り事を自分でするのが難しい私は、生活面での支援を受けながら内職ができる福祉施設に通っている。施設には、様々な障がいを持った幅広い年齢層の人達がいる。内職をする人もいれば、タブレットで動画を観たり、創作活動だったり、テレビを観たりする人もいるのだ。中には、言葉を発せない、文章で話すことが難しい、言葉の意味を理解することが難しい、それがゆえに自分の気持ちや思いを相手に伝えにくい人がいる。

春になれば、新しい仲間と出逢う。高校卒業したての後輩たち。コミュニケーションをとる内に、いつしか仲良くなっている。そして私には、たまらなく愛おしい存在がいる。出逢って数ヶ月しか経たない茉鈴さん。彼女は知的障がいを持っていて、ウロウロ歩いたり、音楽を聴いたり歌ったり、覚えてる言葉を口にしたり、気になる物の匂いを嗅いだりするのだ。ある朝、私が施設へ向かうとお出迎えしてくれたのだ。私が「おはよう」と声をかければ、「おはよう」と返してくれる。その姿に、私は心を奪われてしまった。その訳は、満面の笑顔で私を見つめるからだ。まさに天使だ。それからのこと彼女は毎朝、玄関先の石段にちょこんと座って、私を待つようになった。私を見つけると、いつもニコーッととても嬉しそうにしてくれる。そして、私の服の匂いを嗅いだり服を引っ張ったり、手を握ったり、時には私にくっついて目を見つめて数秒離れなくなるのだ。その目は、とても優しくて愛にあふれている。彼女には、お気に入りな遊びがある。それは私の足裏を蹴る遊び。内職中でも、彼女は遊んでほしそうに近づいてくるのだ。私は足を伸ばしてあげ、蹴られながら作業をこなす。ただ作業をしている時より奪われる体力は倍になるが、彼女が楽しそうにしているなら私は何をされても構わない。心からそう思える。「りりこちゃん」と、呼んでくれる彼女。時には、ウロウロ歩きながら「りりこちゃん可愛い」と大きな声で言うので、私は嬉しさ反面照れくさくなってしまう。天真爛漫な彼女は、どんな時もニコニコしている。だが、本当に笑っている時とそうでない時があるのだ。ちょっとした仕草、ふと見せる表情から私は読み取れてしまう。きっと、私と彼女は似てるのだろう。私は、苦しかったり辛かったりする時ほど笑って隠そうとする。つい強がってしまうのだ。誰かに話したところで解決しない、話したくないことだってある。そんな時は、好きな歌を感情込めて歌う。そうすると、少しだけ心が晴れる。これが私のルーティーンだ。そんな私だからこそ、彼女の気持ちや感情をなんとなくだが理解してあげられるのだろう。だが、私は何もしてあげられない。彼女は、自分の気持ちを言葉で表現することが苦手なので、話を聞いてあげられない。何かに苦しんでいる姿を見ていると、心がキューッと締め付けられるのだ。また、何もしてあげられない自分の無力さに息詰まる。彼女は、自分や何かを噛んでしまう癖があり、心が不安定になると噛む頻度が多くなる。私は何も聞けなくても、「どしたん？」と声をかけるようにしているのだ。そして、足を伸ばしてみる。彼女は、私の足裏をいつもより力強く何度も蹴る。蹴ることにより少しでもストレス発散できればいいなと、私は強く思うのだ。コミュニケーションを取る方法は、言葉だけじゃない。彼女はいつも、私への「好き」を言葉で行動で態度で伝えてくれる。いつだって全力だ。とても純粋で素直だ。だから私も、どんな時も全力で向き合ってあげたり、気持ちに寄り添ってあげたいと思うのだ。そして、彼女は私を必要としてくれる。自分のことを必要とされる幸福感は、きっと何よりも心と体を満たしてくれるだろう。彼女のおかげで、私は日々楽しく強くいられるのだ。

どんな障がいを持っていても、心は動いている。きっと、多くのことを感じ、考え生きている。人は目に見えるもので全て判断してしまう時も、決して少なくはないだろう。また障がいの有無など関係なく、生きとし生けるものは、様々な感情や気持ちがある。ありのままの自分を表現できる人もいれば、素直になれなかったり、言葉を上手に使えなかったり、自分をさらけ出すことがこわくてできなかったりなど、自分を表現することが苦手な人もいるのだ。誰かの言葉や行動の裏側には、表面とは違う真意が隠れていたりする。そのため私達には、洞察力と想像力が必要となってくるのだ。

あなたには今、隣にいる大切な人の心はみえていますか？

小学生区分

香川県健康福祉部長賞

感じる　心

三木町立氷上小学校　五年
吉本（よしもと）　輝虹（こあ）

ぼくは、社会福祉そう合センターに一日体験に参加した事があり、その日たくさんのことを心に感じました。

目が不自由な方は、安全のために白杖を使用し、周りに危ない物がないかを確認しながら歩きます。時刻を知りたい時は、音声で知らせてくれるうで時計を使って、確認します。少し視力のある人は、全てがぼやけている世界なので、自分のくつを分かりやすくするために、せんたくばさみやハンカチをくつの中に入れて、自分のくつがどれなのかを判断しているそうです。

耳が不自由な方は、相手の表情や口の動きから言葉を読み取る事で、人とのコミュニケーションをとっているので、コロナ時代のマスク生活では、大変な苦労があったと思います。

また、だれもが経験することになる高齢者体験では、耳が聞こえづらくなるので、高い声が聞き取りづらく、低い声でトーンを長くすると、聞こえやすいそうです。目もぼやけたり、かすんだりするので、黒色と紺色のちがいが分からず、くつ下などちがう色をはいてしまうこともあるそうです。手の感覚もにぶくなり、ぼくたちの手に軍手二枚をはいたような感覚になるそうです。もし本当なら、小さなもの、お金などを取り出す行為は、かなり大変だと思いました。また、料理をする時のガスの火の青色が見えにくいので、火をちゃんと消したかどうか分からないということも知って、とっても危ないと思いました。

ぼくの周りにはきっといろんな障がいをかかえている人がたくさんいると思います。でも、少しの障がいで目が見えづらいなど、周りの人から見て、はっきりと障がいがあると分からない人も多くいるのだと思います。ぼくのお姉ちゃんも、スポーツで腰を六カ所、圧迫骨折をしてから、服の下に大きなコルセットというベルトをまいて生活していますが、見た目では分かりません。でも、腰が曲げづらいので、くつをはく時は座ってはかないと無理だし、床にあるものを拾うことも痛くて、ぼくに頼むこともあります。はじめは、自分で拾えばいいのにと思ったこともありますが、お母さんから、腰のけがの事を聞いて、レントゲン写真を見せてもらって、「助けてあげてね。」と言われてからは、お姉ちゃんにたのまれる前に、朝の水筒を持っていったり、重い荷物は、玄関まで運んだりしています。なれてくると、お願いされる前に、自分で考えて、しておいてあげたほうがよいことが、分かるようになってきました。

何か苦手なこと、できない事がある人のために、早くその事に周りの人が気がついて、そっと助けることができたら、きっとみんなが笑顔で、楽しく生活していけるのだと思います。ぼくは、必ず、見てみないふりはしません。少しの勇気を出し、「何か手伝いましょうか。」と声をかけたいと思います。

小学生区分

香川県健康福祉部長賞

体がふ自由な人とのふれ合い体けん

観音寺市立観音寺小学校　三年　柳生（やぎゅう）　積沙（かずさ）

わたしはお父さんのしり合いのもうりさんに会いました。もうりさんはむかし事こで体がふ自由になったそうです。

もうりさんには二度会ったことがあります。一度目は「ふれあい夜市」というイベントで会いました。そこでは、車いすにのるたいけんをしました。車いすにのって思ったことは、車いすにのってみたらすごくそうさをすることがたいへんだったので、体がふ自由な人はすごくたいへんだと思いました。

二度目はちがうイベントに行ってもうりさんたちとみんなでいろんなものを買いました。アイスやキーホルダー、ハンバーガーを買ったりしました。もうりさんはあごで車いすをそうさしていたのがすごくたいへんそうだと思いました。体が動かないから食べさせてもらっていました。早く食べることができないので、車いすをかたむけてのみこんでいました。わたしは、ふつうに動いたり、食べたりすることができて幸せなんだと感じました。

さいごにみんなでしゃしんをとりました。もうりさんが「来てくれてありがとう」と言ってくれたのがすごくうれしかったです。またもうりさんに会ったら何か役に立ちたいです。もしまわりでこまっている体のふ自由な人がいたら、たすけてあげたいと思います。

わたしにはしょうがいしゃ手ちょうを持っているおばあちゃんがいます。見た目は元気ですが、こかんせつがわるいので長い時間歩くことができません。

今年の夏休みにおばあちゃんの所へあそびに行きました。「ジブリパークとジブリてん」がびじゅつ館でやっていたので、みんなで行きました。車をちゅう車場にとめる時、車いすマークのある所にとめることができました。このマークはしょうがいしゃ手ちょうを持っている人が使えることをはじめて知りました。足がいたいので、つえを使いながら歩くおばあちゃんのせなかをおしてあげました。

まだまだわたしが知らないことがたくさんあるので、調べてみたり、教えてもらったりしようと思います。

中学生区分
香川県健康福祉部長賞

体育係という仕事を通して

綾川町立綾川中学校　三年
名知（なち）　龍駒（りく）

「吃音症」それは言葉がすらすらと言えず一般的に「どもる」と言われる話し方の障害だ。吃音症を患っている人は日本で約百二十一万人いるそうだ。僕はその中の一人である。症状は比較的軽いものの、人前でしゃべる時や、友達と話す時は症状が出てしまう。それでも僕は怯えることなく、新しく挑戦したことがある。それは体育係だ。

体育係は、体育祭の運営や審判、体育の授業の挨拶をしている。そんな大仕事を三年間全うし続けられているのは理由がある。僕が一年生の頃、担任の先生に体育係をしてみないかと言われた。僕はその時、なにも考えずに承認した。後からよく考えてみると自分に務まるか心配だったが体育の先生は優しく教えてくれた。一か月が経ち、体育の授業に慣れてきた頃、吃音症の症状が出てしまい、挨拶をするのに三分ぐらいかかってしまった。その後、先生に謝りにいったところ、先生は怒ることなく、「困ったら助けてもらいな。誰でも助けてくれるから。」と言ってくれた。僕は今まで吃音の症状が出てしまうと、バカにされたり、笑われたりすることが多かった。だからこの言葉は僕の胸に刺さった。

三年生になり、全校体育の挨拶を任されることになった。全校生徒の前で大きな声を出し、挨拶をするのは難しく、なかなか言えなかった。するとその時一年生の時から仲の良かった友達が変わりに何も言わず挨拶をしてくれた。僕はそれがとてもうれしく心からありがとうと言った。

それから一週間が過ぎ、体育祭本番に近づいてきたころ、また先生に挨拶を頼まれた。その先生は僕が症状で挨拶が出来なかったことを知っている。だけどここで僕に任せたのは何か理由があるはずだ。その事が頭によぎったが気にせず一回落ちついて大きな声を出した。するとすらすら言えた。自分でもびっくりしたがうれしかった。全校体育が終わった後その友達が一番に「言えたな。やったな。」と言ってくれた。僕はとてもうれしかった。ずっと症状が原因で言えなかったことが言えるようになり、その喜びを友達も分かってくれていたところが本当にうれしかった。

この経験を通して学んだことがある。それは自分が出来ないことであったり、不安なことがあったりしても、友達や先生のおかげで出来るということだ。助け合うことでありがとうという気持ちになり、うれしい気持ちになる。当たり前のように簡単にありがとうというのではなく、心をこめてありがとうと言える人になりたい。そして自分の症状にとらわれず、自分らしさを存分に出し、今度は自分が恩返し出来るような頼れる人になりたい。

中学生区分

香川県健康福祉部長賞

ボッチャを通して学んだこと

高松市立木太中学校　一年　垂水（たるみ）　咲桜（さくら）

二〇二一年、夏、東京オリンピック・パラリンピックが開かれた。パラリンピックをテレビで見て、私は、障害がある人たちが、障害の程度に合わせて競技する種目がたくさんあることを知った。車いすバスケットボール、パラバレーボール、パラ卓球などだ。さまざまな種目の中で、私が一番感動した競技がボッチャだ。

ボッチャのルールは簡単で、ジャックボールという白い球に、赤と青それぞれ六球ずつ投げて、赤と青のどちらのボールがよりジャックボールに近づけられるのかを競うゲームである。パラリンピックでボッチャを見た時、

「私もやってみたい。」

と思ったが、きっかけがなくいつかできたらいいな、とあきらめていた。

そんな私に、チャンスが訪れた。六月のフレンドシップデーで、ボッチャが体験できるというのだ。フレンドシップデーとは、障害の有無に関係なく交流を楽しむ日のことだ。私は、初めて取り組むスポーツに不安を感じながらも参加することにした。チームを組んでゲームをしてみると、とても難しい競技だということが分かった。ボールを上手くコントロールすること、相手チームが次どのように投げるかを予想することが難しい競技だと思う。しかし上手くジャックボールに近づけられた時や、ジャックボールと相手のボールの間に上手く入った時はとてもうれしかった。ポイントは、それぞれ交代で投げるジャックボールをどこの位置に置くかだ。相手が投げにくいようにするために遠くにジャックボールを投げると逆に、私たちのチームがジャックボールに届かないこともあり、ジャックボールは基準のような球だから大切だと思った。

そして実際にボッチャを体験して気がついたことがあった。それは、運動が苦手と感じている人でも楽しめるということだ。私は、どちらかというと運動は得意ではないし、好きか嫌いかと言われると嫌いなほうである。しかしそんな私でも十分楽しむことができた。運動が好きな人もそうでない人も障害のある人もない人も、つまりどんな人でも楽しめるスポーツなのだ。そしてチームの中に自然と団結力が生まれることもボッチャの魅力だ。「こうしたほうがいいと思うよ。」などとアドバイスがもらえたり、よかった点をお互いにほめ合ったりして、ボッチャを通してさまざまな人と交流ができ、楽しい時間を過ごすことができた。

私は、みんなが楽しい時間を過ごす、ということを考えた時、運動会の玉入れのことを思い出した。私のクラスには、車いすで生活をしている友達がいる。みんなが使う高いかごにはボールが届かないため、低いかごを使うことになっていたが、かごが低くなったからといって玉入れを一人でするのは難しい。そこで私のクラスは、全員が玉入れに参加できるように話し合った。その結果、友達にボールを渡す役を決めたり、ボールの色を変えたりして工夫することで、全員が参加できる楽しい玉入れになった。

また、体育の授業で、バレーボールのパスをしている時に、車いすで生活している友達がいる班は、全員がしゃがんで友達の目線に合わせてパスをしていた。私は、違う班だったが、その光景を見て心が温かくなった。

そもそも私たちが住んでいる社会には、さまざまな人がいる。すべての人がスポーツを楽しむには同じ条件では難しい。しかし、お互いを理解しようという気持ちを持ち、みんなが参加できる方法を工夫すれば、かかえている障害は、障害ではなくなる。このことはスポーツだけでなく、日常生活にもあてはまることだ。自分たちで、安心して過ごしやすい環境を創り合う努力を続けることで、だれもが生きやすい社会になるのではないかと思った。

高校生区分

香川県健康福祉部長賞

できる人がやる

香川県立善通寺第一高等学校　二年
堂崎（どうざき）　莉愛（りな）

「香川県では、特別支援学校の部をなくします。」

私は、香川総文祭二〇二五の実行委員会に所属している。総文祭とは、全国から二万人もの文化部の代表が集まる別名「文化部のインターハイ」と呼ばれるものだ。そんな凄い大会が晴れて二〇二五年に香川県で開催されることとなった。

さて、最初の言葉についてだが、実は香川県では、障がいがある子でもできる限り障がいのない子と同じように総文祭に参加して欲しい、障がいの有無に関係なく皆で同じ大会を盛り上げたいという気持ちを込めて、その部門をなくしたのだという。確かに、障がいのある人とない人が音楽を楽しむ力が違うというのだろうか。絵画や写真を見て何も感じないというのだろうか。放送や新聞を絶対に聞いたり、読んだりできないというのだろうか。今回は、私の入っている部活の体験も交えて話していきたいと思う。

私は、管弦楽部で打楽器を担当している。私の所属している管弦楽部は、毎年、二学期中間テストの終わりに「支援学校との音楽交流会」というものがある。コロナもおさまりつつあったので、二〇二三年は、例年通り開催された。演奏する場所が違うだけで、いつも通り、何も変わらない。約束の時間が来て、支援学校の子どもがたくさん入ってくる。そこには、歩行器に乗っている子、先生の膝に乗っている子、地面に綺麗に座っている子など色々な子がいた。しかし、その全員が、目をきらきらさせてこちらを見ている。先生の合図が来て、音が始まる。久々の人前での演奏は私をとても高揚させた。一音出す度に気持ちが良い。支援学校の子どもたちは、笑ったり、手を叩いたり、歓声をくれたりとすごく楽しかった。私たちの演奏と支援学校の子どもたちの反応が全て合わさってひとつの音楽だと思った。一体感、そんな言葉があうだろうか。ただひたすらに楽しい。そんな気持ちになったのは、きっと中学生の初めの頃、何も出来ない自分が初めて拍手を貰ったとき以来だ。大事なこと、「音の楽しさ」を、いつの間にか忘れていたのかもしれない。あの日、あの場所は間違いなく音楽で溢れていた。

私は、この体験から、音楽は、感じ方が違っていても皆が一緒に楽しめるものなんだなと気付いた。障がいがあるなんて本当にひとつの個性に過ぎない。もちろんこれは音楽に限った話ではない。障がいがあったとしても、絵画のコンクールで一位をとる人だって、意外な視点から写真を撮れる人だって絶対にいる。障がいがあるから、という理由で制限されてしまうものがあったとしても、障がいがない人が勝手に制限していいものなんてない。むしろ、障がいがない人はある人の可能性を広げるのが役目だと思っても良いと思う。「できる人がやる」。そう考えればいいのだ。障がいのある子にしか、思いつけないものがある。しかし、それを実現する力がないのだとしたら、それは、実現できる人がすれば良い。

最後のまとめとして、私が言いたいのは、環境が障害を生みだすということだ。香川総文祭二〇二五は今後ますます注目されていくだろう。私たちはこの注目をどう利用できるのか。実行委員会としてやるべきことは何なのか。これから二〇二五年までに私たちはたくさん考えていかないといけない。初めて香川県に訪れた全ての人に何ひとつ不可能なことがないようにしたい。

環境といえば、そのうちのひとつに偏見も含まれていると思う。この時代では、障がいを批判するなんてことは少なくなってきたかもしれない。しかし、それは個人の意識が変わったのではなく、社会がそういう風に変化させただけである。それが悪いことだとは言わない。ただ、やはり個人の意識が変わらない限り、障がいに対しての偏見がなくなることはないだろう。障がいは、美化されるものでも醜化するものでもない。ひとつの個性だから。私はそう思う。

中学生区分

香川県知事賞

協走

観音寺市立観音寺中学校　三年

境（さかい）　いろは

心の輪を広げる体験作文・障害者週間のポスター

2023

優秀作品集

香川県 健康福祉部 障害福祉課

〒760-8570 香川県高松市番町四丁目1番10号

令和5年度人権啓発活動地方委託事業（法務省）　令和5年11月発行